
IMAGE ~ラストイメーヅバトル~

赤夜叉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IMAGEラストイメージバトル

【Nコード】

N0360Z

【作者名】

赤夜叉

【あらすじ】

——倒して、勝てっ！—— 壮絶な死闘を繰り広げた『闇の書事件』終結から、10年。体内に『ジュエルシード』を宿したあの男が、二体の最強サーヴァントを連れて帰ってきた！ ミッドチルダに機動六課が発足されて、新たな物語が動き出す。原作での理不尽な結末を迎えたナンバーズの運命を変える為に、敢えて原作通りに事を進める。だが、隼樹達が知らぬ裏で、闇は着々と力を付けていた。時空管理局の闇！ ナンバーズ之最悪な運命！ 甦る最凶の宿敵！ 次々と迫りくる危機に、隼樹は己の力と仲間達の力を駆使して挑

む
!

始動（前書き）

皆さん、こんにちは。

このたび、『イメージ』の続編を再執筆・掲載する事になりました。今回は、前作のような余計な『ゲーム』や『アンチ・ヘイト色』が無いように描いていきます。

物凄くく久しぶりなので、色々不安もありますが、よろしくお願いします。

では、本編をどうぞ。

始動

ある無人の世界。荒れ果てた荒野の中で、一ヶ所だけ異様な光景があった。

無人で生物が棲んでいないハズの荒野に、死体があるのだ。それも、一体や二体ではない。様々な種類の生物の死体死骸が、何十何百――いや、万に届こうかと言う異常な数が死体の山を作り上げている。腐り切った死体は腐臭を放ち、荒野を陰惨で惨劇の場に変えていた。

そして、異常な数の死体に囲まれた中心に、一つの建物があつた。王宮のような外装で、高く聳え立つ建物の大広間に、沢山の影が立ち並んでいた。静寂を守り、微動だにしないで大広間の中央に立ち尽くしている。正体不明の影が立ち並び、不気味な程に静寂な間は、通常の空間とは違うどす黒い雰囲気満ちていた。

影の軍団の前には、玉座が据えられている高い壇があつた。黒一色に内装された大広間と同色の王座に腰を降ろすのは、一人の少女だつた。年齢は十代後半と言つた若さで、下ろされた艶やかな黒い長髪、黒く生地薄いドレス、黒いストッキング、黒いハイヒールと上から下まで全身が黒一色に統一されていた。瞳も黒く、目に映る物全てを飲み込む深さと漆黒さ。逆に肌は透き通るように白く、黒の出で立ちの中でよく映えて艶めかしく見える。

眼前の影の軍団を見下ろし、少女は口を開き、静寂な空間に声を響かせた。

「十年……！ 長かつた……ココまで力ちからを付けるのに、随分と長い時をかけた……！」

漆黒の美少女の脳裏を過るのは、過去に忌まわしき敗北の記憶だつた。

「ようやく我は、復讐と支配の力を得たのだ……！ この力で、あ奴らに復讐する時は近い……！ 憎きあ奴らを葬り去り、全ての世を我が望む漆黒の世界に創り変えてやろうぞ……！」

闇は静かに、その時を待つ。

*

新暦0075年4月。

ミッドチルダでは、時空管理局の一部隊である古代遺失物管理部・機動六課が正式に発足された。部隊長は、小さい頃に起きた『闇の書事件』で魔法の力を開花させた八神はやてが部隊長を務め、部隊長補佐にはパートナーのラインフォースを側に置いている。部下には、一等空尉となった高町なのはと執務官となったフェイト・テストロッサが着き、他にも優秀な成績を持つ者や将来有望の若手まで揃っている、まさにエリート部隊だ。

綺麗に整っている部隊長室に集まった四人は、機動六課発足の挨拶をするべく、ロビーに足を運んだ。隊舎のロビーは広々としており、壁はガラス張りで外の景色が見える面があつて解放的な空間になっている。ロビーに集まっている部隊局員の数は、約30名程だ。部隊局員の中には、守護騎士のシグナム居達とフェイトの姉であるアリシア・テストロッサの姿も見える。彼等を前にして、はやての部隊長としての挨拶が始まる。堅苦しく長い挨拶は嫌われると言う事で、簡潔に短く挨拶を済ませた。挨拶が終わると、前に並ぶ局員一同から拍手が上がった。

拍手が収まるのを見計らつて、はやては再び口を開いた。

「私からの部隊発足の挨拶は以上です。では続きまして、我が機動六課に“民間協力者”として協力してくれる方々を紹介します。

セイバーさんとセイバーオルタさんのお二人です」

はやてに紹介され、若干の色違いをした金髪の少女が一同の前に歩み出た。

一人は、陽の光を受けて煌びやかな金髪を青色のリボンで後ろに結び、端正な顔立ちをした少女だ。瞳の色は碧色で、濡れた宝石のように美しい。凜とした顔つきからは、意思の強さをハッキリと現しながらも、どこか穏やかさも感じられる。

「初めまして。紹介にありました、セイバーです。一年間、よろしく願います」

丁寧な挨拶で、セイバーは名乗った。

「セイバーオルタだ」

次いで名乗ったのは、彼女の隣に立つセイバーオルタだった。淡々とした口調ながらも、“王”としての威圧的なモノが感じられる声をしていた。

髪は金色だが、隣のセイバーと比べると若干薄い感じに見える。着ている衣装も、白い服を着用してるセイバーとは対極の黒いゴスロリ衣装である。肌も美白と称するくらい綺麗で、目力はセイバー以上だ。もう一つ両者の違いを挙げるとすれば、頭の天辺に“アホ毛”が有る無しくらいだろう。実力も違いがあるが、ソレは追々明らかにされる事となる。

紹介を聞いた局員一同は、男女問わず二人を凝視していた。姿がソックリである事もそうだが、何より“存在感”が違っていた。明らかに他を圧倒する気があり、畏怖する者もチラホラと見える。そ

して何より、気高い気品さ漂う美しさに数少ない男性陣は見惚れていた。

ココで挨拶と紹介は終わり、といきたいところなのだが、そうはいかなかった。実は、もう一人民間協力者が居るのだが、この場に居ないのだ。

どないしたもののか、と部隊長のはやては頭を抱えた。

その一方で、セイバーはロビーの入り口に目を向けた。

——ヤッベー！ 完全完璧に遅刻だよ……！

ロビー入り口の陰に座り込み、頭を抱える一人の男が居た。

地味と凡人を合わせたモノを絵に描いたような容姿の男で、眼鏡をかけている。彼の名前は、葉谷資隼樹^{はやしゆんぎ}。体内にロストロギア『ジュエルシード』を宿し、セイバーとセイバーオルタのマスターとなつた男だ。

——くっそ〜！ 今日の挨拶に緊張して眠れなかったのがマズかったか……。いや、一番の原因はセットした目覚まし、電池切れで鳴らなかつた事だつ……。！ 断じて、俺は悪くない！

遅刻の原因は、寝坊と言うベタっちゃあベタな理由だった。

いや、最大の原因は“敢えて原作通りの選択をした自分自身”だ。

——何で？ 俺、今まで学校の入学式、始業式、終業式、卒業式と集まり事には遅刻した事無かつたのに、何で今日遅刻なのよ？

何でよりによつて、初めての遅刻が今日なんだよ〜！？ マジあり得ねえ〜！

頭をグシャグシャと掻き乱して、隼樹は苦悩する。

そうこうしてる間にも、時間は無情に過ぎていく。今更出ていても気まずいだけであり、時間が過ぎればどんどん出づらくなる。

——どうすればいい？ どうすれば……？

悩んだ時の常套句を心中で呟き、隼樹は解決策を考える。

しばし考えた後、意を決した顔で言つた。

「よしっ……！ 今日のところは帰ろう！」

「そうはいきませんよ、ジュンキ」

不意に聞こえた後ろからの声に、隼樹は体を揺らし、顔を引き攣らせた。

そして、恐る恐る後ろを振り向く。

背後に立つのは、腰に手を当て、呆れた表情で隼樹を見下ろすセイバーだった。

引き攣った笑みで、隼樹は挨拶する。

「や、やあ、セイバー。おはよう。今日も綺麗だね」

「ありがとう、ジュンキ。ですが、いくら褒めたところで、見逃しはしませんよ」

「いや、ソコを何とか……！ って言うか、どうして起こしてくれなかったのさ！？」

「起こしに行きましたよ。そうしたら貴方が、「分かった。先に行つて」と言いましたので」

「え……？ マジで……？ 全然覚えてないんですけど……」

どうやら、二度寝してしまったようだ。

愕然とする隼樹の腕を掴み、セイバーは無理矢理立たせて強制的にロビーに連れて行く。

「ちよっ……セイバー！ タイムタイム！」

「言い訳も制止も聞きません。いずれ顔を合わせるのですから、挨拶くらいはキチンとして下さい」

待つよう訴える隼樹を、セイバーは問答無用でロビーに連れ込んだ。

ロビーで待たされた局員一同の注目が、一斉に隼樹とセイバーに向いた。毅然とした態度でセイバーは、隼樹を一同の前に立たせた。完全に退路を断たれた隼樹は、逃げる事を諦めた。自分に視線を注ぐ一同を見渡して、より一層緊張感が増す。ぎこちない動きで一同と向かい合い、挨拶をした。

「えっと、あの……は、葉谷資隼樹です。その、よろしく願います」

ロビーは、静寂を保っていた。登場の仕方が仕方だったので、皆啞然としているのだ。

——ほう！　こういう空気になっちゃったあ！

微妙な空気に、隼樹は激しく帰りたい気持ちに駆られた。

始動（後書き）

後書きは……ん、特に無いかな。
感想・ご意見など、気軽にどうぞ。
では。

教導

「もう嫌だ……。俺帰る」

ロビーでの気まずい挨拶を終えた後、隼樹は隊舎の自室で落ち込んでいた。

ただでさえ人前で行動するのは苦手なのに、更に大恥をかく事になったのだ。落ち込むなと言う方が、無理である。

そんなに恥ずかしい思いをしなくなかったのなら、機動六課発足や民間協力者にならなければいいじゃん、と読者諸兄は思い込もう。だが、実は彼なりの理由があるのだ。

今回の隼樹の目的は、ナンバーズの完全救済である。原作では、時空管理局トップの歪んだ正義の犠牲者であるにも関わらず、闘いに敗れた敗者と言う事で、半数近くが拘置所に入れられてしまった。その結末に納得いかない隼樹は、敢えて原作通りの流れに乗る事にした。『闇の書事件』では、はやて達が管理局入りを拒むよう仕向けたが、事件後で冷静になって考えて計画を変更する。機動六課は、地上で自由に動ける部隊だ。ソレを設立させたからこそ、なのは達主人公勢はスカリエッティ一味が関わるレリック事件を捜査する事が出来た。一般人には、万が一の逮捕権はあるが、捜査権は無い。それならば、自然と事件に関われる原作の状況にした方が良く、隼樹は考え直したのだ。

問題は、どうはやてを管理局に入局させるかだったが、意外な展開になった。なんと、はやての方から管理局に入局したいと言いだしたのだ。友達であるなのはに協力したいと言う、純粋な想いからだった。最初は反対した守護騎士だったが、後にギル・グレアム提督と和解を果たし、局員全てが悪い人間でない事を理解して、主に付き従った。続いてフェイトやアリシアも、同じような想いから入局を決意して、あれよあれよと言う間に図らずも隼樹が望む通りに

事が運んだ。

そして、隼樹、セイバー、セイバーオルタの三人は、入局こそしなかったが、『民間協力者』と言う事ではやて達に協力する立場となった。ちなみに、隼樹が持つ『イメージ』は希少技能^{レアスキル}として、二人の騎士王は地球出身の例外的魔導師と言う事で何とかごまかす事に成功した。

そんなこんな色々な事があり、現在に至る。

自室に居る隼樹は、未だロビーでの忌まわしい記憶を引き摺っていた。

「はあ……いつそ死のうかな……」

「ジユンキ。落ち込む気持ちは解りますが、いい加減に元気を出して下さい」

隣に座っているセイバーが、励ましの声をかける。

しかし、なかなか隼樹は立ち直ってくれない。両手で顔を覆い隠し、俯いてしまう。

「だって……あんな恥ずかしいの初めてだったんすよ……？」

「全く、つくづく情けないマスターだな、貴様は」

壁に寄りかかってるセイバーオルタは、呆れてかぶりを振った。

しかし、一転して妖艶に笑みで落ち込む隼樹の前に歩み寄り、屈んで目線を合わせる。訝るセイバーが見てる前で、右手を伸ばして隼樹の顎を指先で掴み、顔を上げさせた。

「なんなら、私が慰めてやってもいいのだぞ？」

「え……？ な、慰めるって……？」

「勿論、身体でだ……！」

「待ちなさい、オルタっ！」

セイバーは顔を赤くさせ、半ば反射的に声を上げてオルタを睨んだ。

常識を持つ者からすれば、オルタの言動は少なくとも真昼間に言う事ではない。

「貴女は一体何を考えているのですか!？」

「決まっている。情けないマスターを、私が慰めてやろうと言っているのだ……身体を使つてな」

「ですから、ソコがおかしいのです! 他の慰め方を知らないのですか?」

「何だ? 自信が無いのか?」

オルタは挑発的で妖しげな笑みをセイバーに向け、隼樹に体を寄せた。お互いの体を密着させて、女性特有の胸の膨らみを押し付ける。独特の弾力と柔らかさ、体温で迫るオルタは妖艶な笑みの口から濡れた舌を出して、隼樹の首筋を舐めた。

「ひいつ!？」

いきなり首を舐められ、くすぐったさに隼樹は悲鳴を上げた。

オルタの行為に、セイバーは顔を真っ赤にさせ、ワナワナと体を震わせる。

「ジュンキから離れなさいっ!」

「ならば、力づくで奪ってみせろ」

「上等です!」

挑発を受けて、セイバーは甲冑姿に変化した。

コレには、流石の隼樹も落ち込んでる場合ではなく、慌てて止め

に入る。

「ままま、待て待て！ お前達二人が暴れたら、冗談抜きで隊舎が跡形も無く吹き飛んじゃうから！ 俺なら、もう元気になったから！ 喧嘩は止めようよ！ ね？」

「しかし……！ いえ、マスターがそう言うのでしたら……」
「ふんっ。つまらん」

マスターが仲裁に入り、とりあえず両者は矛を収めた。
二人の衝突を防げて、隼樹は本気で心底安心した。

「ん？ 何だアレは？」

ふとオルタの目が、窓の外の光景を捉えた。
隼樹とセイバーも見ると、外の海上スペースに廃墟があった。

*

海上にある空間シュミレーターで、新人フォワード陣の訓練が行われていた。

ガジェット・ドローンと呼ばれる自律型機械兵を相手にした訓練で、リアリティの高い廃墟が舞台となっている。相手のガジェットには、アンチ・マギング・フィールドAMFと呼ばれる特殊なフィールドを張る。これは、魔力結合を妨害して、魔法効果を打ち消すものだ。魔法を駆使して闘う魔導師にとっては、厄介なフィールドで、セイバーの対魔力に似ている。

訓練に挑むのは、青髪の少女のスバル・ナカジマ、オレンジ髪の少女のティアナ・ランスター、赤髪の少年のエリオ・モンディアル、

ピンク色の髪をした女の子のキャラ・ル・ルシエの四人のチームだ。皆まだ新人だが、才能に溢れている将来有望な魔導師達だ。厄介なAMFに苦戦するものの、ティアナの指揮の下、コンビネーションでガジェットを撃破していった。一発の破壊力があるスバルは接近戦で挑ませ、エリオは得意のスピードを活かして反撃の隙を与えず、キャラは召喚魔法で鎖を出して相手の動きを封じたりとフォローを行い、ティアナは『多重弾核射撃』と呼ばれる魔力の外殻で弾丸を覆って放つ魔法でAMFを突き破り、ガジェット本体の装甲を貫いていく。メンバーの能力を活かしたティアナの戦略で、見事に全機破壊する事が出来た。

新人四人の活躍を、教導官のなのはとシャリオ・フィニー——通称・シャリーと呼ばれる眼鏡をかけた女性局員の二人が、一つの廃ビルの屋上から一部始終を見ていた。

新人とは思えない活躍に、シャリーは感嘆する。

「わゝ、凄い！ 全機撃破……！」

「うん。初めての訓練にしては、皆いい感じだね」

なのはも、満足げに頷いた。

「なのは」

不意に後ろから名前を呼ばれ、なのはは振り返った。

自分と呼んだのはシャリーではなく、いつの間にか屋上に現れたセイバー、オルタ、隼樹の三人だった。

「はええっ！？」

突然、隣に現れた三人に、シャリーは驚きの声を上げた。

一方、なのはは特に驚きもせず、落ち着いた様子で話しかけた。

「セイバーさん、セイバーオルタさん、それに隼樹さんも。どうしたんですか？」

「窓から、先ほどは見えなかった廃墟を目にしたので」

「ああ、そうでしたか。ココは、空間シミュレーターと行って、環境を自由に設定してリアリティの高い立体映像を作って訓練する場所なんです」

訪れた理由を述べたセイバー達に、なのはが場所の説明をした。
訓練と聞き、僅かにオルタの眉毛がピクリと動いた。

「つまり、今訓練を行っていると言う訳だな」

「はい。あ、でも丁度ついさっき終わったところです」

なのはが周囲に出してるディスプレイに、視線を向けた。
画面には、無事に訓練課題をクリアした新人四人が、喜び合っている様子が映っている。

「訓練内容は、どのような感じなのですか？」

「さっき終えたのは、ガジェットを相手にした模擬戦闘です。この後、しばらくは基礎をみっちり固めて、個々の能力を高めていこうと思っています」

「基礎、ですか……」

今後の訓練予定を聞いたセイバーは、怪訝そうに呟いた。

基礎固めの目的は、おそらくフォワード四人の基本能力を底上げして、危険な目に遭わせないようにしたいのだろう。しかし、聞けばティアナとスバルは、訓練学校で一通りの訓練は既に受けており、エリオとキャラも保護者であるフェイトの下でそれなりに力を付けている。実際に、四人は自分達の力だけでガジェットを全て破壊し

ている。基礎固めを完全否定する気は無いが、それよりも少しでも多く実戦形式の訓練をするべきではないだろうか。

訓練の内容に疑問を抱くセイバーだったが、担当の教導官がなのはである以上、自分が余計な口出しをするべきではないと判断した。しかし、オルタは違った。

「高町」

「何ですか？」

「午後の訓練は、私にやらせる」

「えっ!？」

発言した本人以外が、一斉に驚きの声を上げた。マスターである隼樹は、恐る恐ると言った風に訊いた。

「え……? 一体どういう風の吹き回し？」

「なに、最近体を動かしていないからな。鈍らないよう、動かしておこうと思っただけだ」

薄笑いを浮かべるオルタに、なーる、と隼樹は納得した。

それと同時に、新人達が危ないとも思った。温厚なセイバーと違って、オルタは妙に好戦的な気がある。ちゃんと手加減をするだろうが、オルタ一人に任せるのは危険だ。本人には悪いが。

隼樹の心配を他所に、オルタはなのはに教導の件を交渉する。最初は戸惑ったのはだが、高い実力を有し、何よりフェイトの師匠でもあるセイバーの分身のような存在だ。もしかしたら、自分では教えられない事を新人達に教えられるかもしれない。

「分かりました。それじゃあ、セイバーオルタさん、よろしく願います」

「ああ、任せておけ」

答えるオルタは、ニヤリと口元を歪めて笑った。

ソレを見た瞬間、シャーリーと隼樹は嫌な予感がして顔を引き攣らせた。オルタに背中を向け、声を潜めて囁き合う。

「あの、隼樹さん。彼女、大丈夫なんですか？」

「いや、大丈夫だと思いたいですけど……。うーん、やっぱり不安だ」

不安が拭えない隼樹は、一つ対策を起用する事にした。

「セイバー。セイバーも一緒に参加してくれない？」

「私ですか？」

「お願い……！」

必死に頼み込む隼樹の様子から、心情を察したセイバーは頷いた。

「分かりました。オルタが無茶をしないよう、見張ります」

「ありがとう」

こうして、セイバーとオルタの二強英霊サーヴァントが訓練の教導をする事になった。

＊

午前の訓練を終え、休憩と昼食を済ませた後、午後の訓練の時間となった。

新人四人は訓練用の服に着替え、空間シュミレーターに集まっている。環境は午前と同じく廃墟で、体力と魔力を回復させ、起動し

たデバイスも構えて準備万端だ。

そんな一同の前に立つ臨時教導官は、騎士甲冑を纏ったオルタとセイバーの二人だ。

二人の噂はフォワード四人も聞いてるので、午前の訓練以上に緊張した様子をしている。

固まる一同の顔を見渡して、オルタは口を開いた。

「さて、訓練を始める前に、貴様等に確認したい事がある。青髪の貴様……！」

「は、はいっ！」

指名されたのは、短い青髪でボーイッシュな容姿をした少女のスバルだった。少し上ずった声で返事をした。威圧的な雰囲気放つオルタを前にしてるのだから、無理も無い。

ナチュラルに威圧感を放っているオルタに、居合わせてるセイバーは早くも眉根にシワを寄せた。

そんな周りの気疲れなど意に介さず、オルタは一つ問い掛けた。

「貴様等は基本四人一組のチームで闘うようだが、チームワークの意味を知っているか？」

「え……ええつと……」

いきなりの質問に取り乱すも、何とかスバルは答える。

「はいっ……！ チームワークとは、チームの皆が力を合わせて一丸となって立ち向かう事です！」

訓練校でも、スバルとティアナは教導官からそう教わった。今でも、ソレが正しいと思っている。

しかし、答えを聞いたオルタは、皮肉げに笑い、衝撃の言葉を言

い放つ。

「ふっ……！　やはりな……そんな考えでは、貴様等全員、死ぬな
っ……！　間違いなくっ……！」
「ええっ……！？」

訓練校での教えを完全否定され、スバルとティアナは激しく動揺した。

エリオとキヤロも、それなりに驚き、目を丸くしている。
その時、たまりかねてセイバーが口を挟んだ。

「オルタ！　いくら何でも直球過ぎます！」
「だが、私は間違った事は言っていない。そうだろうか？」

オルタの問いに、セイバーは押し黙ってしまう。
言葉は選ぶべきだが、本質は間違っではない。だから反論出来なかった。

それからオルタは、動揺収まらず、チームワークの意味について悩むフォワード四人に言った。

「とりあえず、“真のチームワーク”の意味は頭の片隅にでも置いておけ。

早速、訓練を始めるが……内容は、私が相手をする四対一で行う
実戦形式の模擬戦だっ……！　その際、私は貴様等を“殺す気”で
かかる……！　だから貴様等も、本気で、必死になって、全力で生
き残るよう動けっ……！　相手を倒そうなどと考えるな……とにかく
く、生き残る事だけを考えろっ……！　いいな？」

笑みを浮かべたオルタを見て、フォワード一同は背筋に悪寒を感じた。

今まで感じた事が無い本物の“殺気”と“命の危険”だった。周囲の空気が下がり、冷や汗を流し、恐れを抱いた途端に足は震えだす。

凍りつく一同を前に、オルタは妖しくも恐ろしい笑顔で黒い約束^エされた勝利の剣を構える。
クスカリバー

「さあ、始めるぞ……！」

冷徹な声で、訓練開始の合図をした。

自分（前書き）

言い忘れてました。

リインフォースが生存してるので、本来彼女の消滅後に二世として生まれるツヴァイは登場しません。

ツヴァイファンの皆さん、すみません！

自分

オルタの実戦形式の訓練は、フォワード四人にとって地獄の時間だった。

混じりつ気なしの本気の殺気を当てながら、迫りくるオルタは四人の目には悪魔が戦鬼せんきに見えていた。一応攻撃の際には手加減されてるが、それでも容易にアスファルトの地面を斬り、ビルの壁を破壊し、凄まじい剣圧を放っていた。想像を超えた威力を誇る凶悪な刃に、コレで本当に手加減してるのか、と疑問に思うのも一瞬で、仰天すると同時に圧倒的恐怖を憶える。

ティアナが牽制で放った魔力弾は、オルタの高い対魔力で簡単に掻き消されてしまう。ガジェットのアMFを貫通した多重弾核も撃ったが、通常魔力弾と同様に無効化されてしまい、激しく動揺した。その他にも、全員が一通りの魔法を繰り出したが、全て対魔力の前に無効化されてしまった。魔導師の武器である魔法を封じられては、とてもじゃないが勝ち目は無い。

ティアナとスバルは、機動六課に訪れる前に陸士386部隊に所属して、突入隊フォワードとして危険な任務も、それなりにこなしてきた。しかし、今行ってる模擬戦は、ソレ等がお遊戯のように思える程に過酷且つ危険な状況で、まるで別物だった。

自分達の力が一切通用しないと悟って理解したフォワードの四人は、指示された通り“生き残る”事だけに全力を注ぎ出した。初めて感じる“迫りくる死の恐怖”を切り抜ける為に、四人は知恵を絞り、魔力を最後の一滴まで使いつくす。

最初は様子見をしていたセイバーだったが、オルタが過剰な攻撃を仕掛けそうになった時は、すかさず止めに入った。怪我をしない“ままごと訓練”など生温いが、万が一にも戦闘不能状態にさせる訳にもいかない。

時折セイバーが止めに入りつつ、午後の地獄模擬戦は続けられた。

その様子を、隼樹、なのは、フェイト、アリシア、ヴィータの五人は、心臓をハラハラドキドキしながら見守っていた。

「容赦ねーな、セイバーオルタ……！ セイバーを参加させというホント正解だったよ……！」

「ああ、ああ……！ エリオ！ キャロ！」

二人の保護者であり、過保護な面があるフェイトは、もう気が気じゃなかった。心配し過ぎて、拳動不審になっている。

そんな彼女を、姉のアリシアが落ち着かせようとする。

「フェイト、落ち着いて！ セイバーが付いてるんだから、大丈夫だよ！」

両肩を掴んで、耳元で声をかける。

アリシア・テストアロッサも妹と共に入局して、二等陸士として機動六課に所属している。魔法の才能はフェイトより劣るが、それでもランクは陸戦AAAと言う高い実力を備えている。

取り乱すフェイトと宥めるアリシアの姉妹のやり取りを隣に、なのはも苦笑していた。

「ううー！ セイバーオルタさん、過激過ぎるよ……！」

闘いの厳しさや、戦場においての命の危険性を教える事自体は、なのはも反対する気は無い。

しかし、物事には順序と言うモノがあり、いきなり過激過ぎる地獄模擬戦は、新人の四人には早すぎるように思えた。だが、今の教官はオルタであり、ソレを許したのは他でもないなのは自身だ。故に、意見出来ず、ただ見守る事しか出来ずにいた。

悪魔的かつリアル鬼ごっこ的な模擬戦は、オルタが終了宣言をす

るまで続けると言う、何ともアバウトな決まりになっている。しかも、手加減していても実力差があり過ぎて、オルタが一方的に新人四人を追い詰める戦況だ。傍から見たら、リンチと捉われかねない光景である。

結局、フォワード四人は、全員がオルタに撃墜されてアウトとなった。魔力も体力も全て使い果たし、疲労困憊の状態で地面に倒れている。まだ恐怖が抜けきれず、体は小刻みに震えてる。仰向けになった一同の視界には、夕焼け空が広がっていた。

疲れ切った一同を見下ろすオルタには、全く疲労の色が見えない。汗もかかず、呼吸も全く乱れてないどころか、かすり傷一つ付いていなかった。

「まあ、初めの内はこんなものだろう」

オルタが見下ろす先で、フォワード四人は、切れ切れに呟く。

「し……死ぬ……！ 死ん、じゃ、う……！」

「な、なのは、さんの……訓練も、キツかった、けど……！ セイ、バー……オルタ、さんの……もう、次元が、違う……！」

「キャ……キャロ……。大丈夫、夫……？」

「う、うん……」

激しく呼吸を乱す四人は、もはや喋る事すら辛くなっていた。特にまだ若過ぎる上に女の子のキャロは、一言返すので精一杯の状態だ。

「皆さん、よく頑張りましたね」

立ち上がる事すら出来ない程に疲労した四人を、セイバーは労った。

その一言が、心身ともに疲れ切った四人の心中に、沁み渡っている。たった一言で、これ程嬉しく思ったのは、初めてだった。

しかし、そんなフォワード一同に、オルタから戦慄の言葉が告げられる。

「今日のところは終わりだが、これから午後の訓練はほぼ全て私との実戦形式の模擬戦だ。覚悟しておけ……！」

「ええええええええええええ……！？」

衝撃の予定を知らされ、フォワード四人は最後の力を振り絞って絶望の声を上げた。キャロはもう限界に達したようで、喉を枯らして激しく咽出す。

「待ちなさい、オルタ！」

これには、流石のセイバーも我慢出来ずに声を上げた。

「いくらなんでも、毎日貴女と訓練をしていては、新人達の身が持たない。それに、いつ出勤するか解らないのですよ？　せめて一日二日空けるか、それが出来なければ、代わりに私が彼女達の相手をお願いします」

「ふむ……」

聞いたオルタは、セイバーの意見を一蹴したりせず、顎に手を添えて考え込んだ。

そして、この時の新人四人の心中は一つ。

——セイバーさん！ 私達を救ってくださいっ！

救世主に見えるセイバーの意見が通る事を、必死に、そして心を一つにして切に願う。

ややあって、オルタは口を開いた。

「いいだろう。ならば、たまに休日を含みながら貴様と私で交代してやる事にしよう。明日の新人達の相手は、貴様がやるのだぞ？」
「分かりました」

——セイバーさん、ありがとうございますっ！

フォワード四人は、心中にお礼を良い、快哉を叫んだ。明日の休みは取れなかったが、連続でオルタの相手をすると言う最悪の展開だけは免れた。

屋上から見守っていた隼樹達は、フォワード四人が無事に訓練を終えた事に、とりあえず安堵した。

*

訓練初日から始まった、『騎士王様によるスパルタを超えた超スパルタ模擬戦と言うか、コレただの新人イジメじゃね？ 的訓練』は、たまに休みを含みながらほぼ毎日続けられた。

午後の訓練は、セイバーとオルタの交代で行われる本格実践形式の模擬戦で、新人達がやる事は基本的には変わらない。とにかく、生き延びる事に全力を尽くす。

オルタ程酷くは無いが、普段は温厚なセイバーも訓練となれば、殺気をぶつけて襲い掛かってきた。対するフォワード四人も、最初は死の恐怖に怯えて体が竦み、動けなくなってしまう事もあった。だが、訓練を続けていく内に、怯えながらも生き延びる道を模索するようになり、また行動も起こすようになっていった。

射撃魔法を専門にするティアナは、迫りくる相手の顔目掛けて魔力弾を発射して、時間稼ぎの目くらましを作る。エリオとスバルは得意の機動力を活かして、ティアナとキャロをフォローするように

なった。キャロは使役竜のフリードリヒの火炎を使い、ティアナも動き回り、相手の動きや仲間達の状況を観ながら指示を出す。色々と工夫を凝らし、自分の持てる力を最大限に発揮させて地獄の時間を生き抜いていく。

なのはの訓練で基礎を固め、セイバーとオルタによる模擬戦で実戦の恐さを体験しながら実力を上げていった。

当然、そんな激しい訓練にデバイスは耐えられず、実戦用デバイスに切り替える事となった。予定よりデバイスチェンジの時期が早まったが、構わず訓練は続けられた。

*

そして、地獄訓練が続いて数日が経った。

フォワードの四人は、最初の頃より大分恐れで動きが鈍らなくなり、撃墜されるまでの時間を伸ばしていた。訓練の空間も廃墟や荒野、森林と変えていつて様々な場所に対応出来るようになっていく。昼食を済ませて少し休み、午後の訓練に行こうとした時だった。隊舎内で、アラームが鳴り響いた。山岳地帯を走るリニアールでレリックらしき物とガジェットの襲撃を確認して、出勤命令が出されたのだ。

スバル、ティアナ、エリオ、キャロの四人にとって初実戦任務だ。

「皆！ いけるね？」

「はいっ！」

なのはの声に、フォワード四人は力強く答えた。

前日はセイバー達による訓練は休みだったので、体力も魔力も充分に回復している。出勤には問題無い。

ふとフォワードの四人は、出勤の見送りにきたセイバーとオルタを見つけた。小さく頷くセイバーとオルタに、フォワード四人は敬礼をした。

そして、初出勤した。

*

パイロットを務めるヴァイス・グランセニツクのヘリで、なのは達を乗せたヘリは山岳地帯を目指す。フェイトは別件で外に出ていて、飛行して現場に駆け付けるそう。新人達の実力を試すと言う事もあり、副隊長であるシグナムとヴィータは欠員している。

航空型のガジェットが多く接近しており、空の敵はなのはとフェイトの二人が殲滅する事になった。フォワードの四人は、直接リニアレールに移り、車内のガジェットを破壊しつつレリックを確保する事が役目だ。

不意に、スバルが口を開いた。

「何か、あんまり緊張しないね」

「そうですね」

隣に座ってるエリオが、頷いた。

二人だけでなく、ティアナとキャロも初の実戦だと言うのに、不思議とあまり緊張していなかった。いや、実戦に挑む怯えや不安が少ない、と言った方が正しいか。セイバーとオルタの二強による、過激な模擬戦を受け続けてきた影響だろう。

しかし、だからと言って気を抜いてはいけない。

そう思ったティアナが、二人に注意する。

「アンタ達、緊張し過ぎないのはいいいけど、緊張感を持つてなさいよ」

「ご、ごめん、ティア」

「そ、そうですよね。セイバーさん達の訓練でも、ずっとそうしてきたんですから」

スバルとエリオは素直に謝り、セイバー達との訓練の体験を思い出した。

気を引き締め、任務に挑む緊張感を持つ。

そして、ヘリ後方のメインハッチが開かれた。

「じゃあ、先に出て空の敵は引き受けるから、皆は列車をお願いね！」

「はいっ！」

フォワード四人の迷いや恐れが無い返事を聞き、なのはは安心して空に飛び降りた。そして、空中でセットアップしてバリアジャケットを身に纏い、レイジングハートを構える。飛行魔法で空を舞い、駆け付けたフェイトと二人で航空型のガジェット？型殲滅に動く。

一方、なのは達がガジェットの相手をしてるお陰で、ヘリは無事に降下ポイントに着いた。フォワードの四人は、なのはのように空中ではバリアジャケットを展開せず、ヘリの中で行った。コレも、安全確実に戦闘準備を整える為だ。

「スターズ3、スバル・ナカジマ！」

「スターズ4、ティアナ・ランスター！」

「行きますっ！」

まずは、スバルとティアナが先行してリニアレールの上に着地した。

「ライトニング3、エリオ・モンディアル！」

「ライトニング4、キャロ・ル・ルシエとフリードリヒ！」

「行きますっ！」

続いて、エリオとキャロ、それにフリードも無事に列車に降りた。全員が着地してすぐに、車内に潜り込んでるガジェットが動き出す。ガジェット？型の黄色いレンズから光線が放たれ、天井を破って表に出てきた。

その時には、既にティアナが拳銃型デバイス『クロスミラージュ』を構え、射撃体勢に入って待ち構えていた。

「シュートっ！」

オレンジ色の魔力弾が発射され、AMFを貫き、そのままガジェットの装甲を貫通して破壊した。

畳みかけるように、スバルがローラーブーツ型デバイス『マツハキヤリバー』で突っ込み、空いた穴から車内に入り、籠手型デバイス『リボルバーナックル』の突きでガジェットを一撃粉碎する。初陣の緊張による動きの鈍りも見られず、次々とガジェットを破壊していく。

スターズとライトニングは、それぞれ前方車両と後方車両に分かれ、挟み込むように突き進む。

ティアナとスバルは、前方車両から制圧しにかかった。相手のガジェットは、力で劣る分は数に物を言わせて襲い掛かってくる。

——私が道を作るんだっ！

後方のティアナの援護射撃を受けながら、スバルは敵に突っ込んだ。

「リボルバーシュート！」

リボルバーナックルのスピナーを高速回転させ、加速させた衝撃波を放つ。

強力な衝撃波は、眼前に立ち塞がるガジェットの装甲をひしゃげ、本体を破壊した。ついでに、その先にある列車の扉も壊して道を開いた。

一方、後方から攻めるエリオとキャロのコンビの前に、大型のガジェット？型が立ち塞がった。上部から太いアームを伸ばして、攻撃してくる。ソレをエリオは、得意の高速移動でかわし、一気に懷に潜り込む。槍型デバイス『ストラーダ』の刃に魔力変換させた電撃を付与させ、ボディを下から斬り上げるように振り上げた。が、装甲が思った以上に硬く、切り裂けない。刃と装甲の間で、激しい火花を散らせる。

「くっ……！」

苦戦するエリオの前で、ガジェットは強力なAMFを展開させる。効果が強く、間近のエリオの電撃は掻き消されてしまった。

「エリオ君！」

戦況が悪い流れに傾いてる事に気付き、キャロは考える。

——私が何とかしなきゃ！

エリオが敵を押さえてる間に、キャロは車内を見回し、傍で飛んでるフリードを見る。

そして、一つの手段を思い付き、実行を決意する。魔力を高めてAMFに抗い、フリードに指示を出す。

「フリード！ 天井に向けてブラストフレア！」

「きゅく〜！」

フリードは開いた口に火炎を溜め、天井に向けて放つ。火炎の直撃を受け、天井に大穴が空いて空が見えるようになる。

「エリオ君！ 一旦下がって！」

「分かった！」

キャロの指示に従い、エリオはガジェットから離れて大穴から列車の屋根に移った。

先にキャロは屋根に居て、足下にピンク色の魔法陣を展開している。何か魔法を仕掛けるつもりだ。両手にはめられたグローブ型デバイス『ケリユケイオン』の甲部分の球体が、強い輝きを発する。

「竜魂召喚っ！」

魔法の発動と同時に、フリードの小さな体が光に包まれた。

光が収まると、中から現れたのは巨大な白い竜だった。成人よりも遥かに大きな巨体を誇る白い竜は、キャロの魔法によって本来の姿に変身したフリードである。セイバー達との命懸けの訓練の中で、竜を制御する力を得ていたのだ。

フリードの赤い眼は、車内に居るガジェット？型を睨んだ。

「フリード！ プラストフレア！」

グオオオオオオオオオオオオ！

巨体に見合った野太い雄叫びを響かせ、フリードは口に火炎を溜める。

そして、ガジェットに向けて放射した。オレンジ色の火炎は、大型ガジェットのボディを軽く飲み込んだ。AMFで防ぐので精一杯

のようで、反撃してこない。ソレを見たエリオは、好機と見て動く。

——僕が決めて終わらせるっ！

再び槍先の刃に電撃を付与させ、重力と振り下ろす勢いと腕力を乗せ、ガジェットに斬りかかる。今度はAMFを破り、しかも火炎の熱で装甲が溶けて脆くなり、ストラーダの刃が通った。自分よりも大きな機体を誇るガジェットを、上から真つ二つに両断する。断面で放電を起こし、機体は爆発した。

「エリオ君！」

喜びと安心から、キャロは笑顔で声を上げた。

車両内と外のガジェットは全て殲滅され、レリックもスターズのスバル達が確保した。コントロールも取り戻して、車両を止める事も出来て、無事に任務は完了する。

*

同時刻のとあるラボ。

一人の男が、広々とした研究室で、リニアレールでの機動六課の活躍を眺めていた。白衣を着た男は、ジェイル・スカリエッティ。広域指名手配されている違法研究者で次元犯罪者だ。彼が眺めているモニターには、今の機動六課の戦闘データが表示されている。

そして、真横には小型のディスプレイが展開しており、一人の女性映っていた。ウェーブのかかった紫色をした長髪の女性は、戦闘機人？1のウーノだった。

『ドクター。追撃のガジェットを送りますか？』

「いや、止めておこう。レリックは惜しいが、機動六課の戦闘デー

タが録れただけで、良しとしよう」

ウーノに答えたスカリエッツィは、大型モニターに顔を戻した。

「それにしても、この案件はやはり素晴らしい。私の研究にとって、興味深い素材が揃っている上に……」

一旦言葉を切り、映像を切り替える。映し出されたのは、フェイトとエリオだった。

顔の笑みを深め、スカリエッツィは言葉を続ける。

「生きて動いている『プロジェクトF』の残滓を、手に入れるチャンスがあるのだから……！」

しかし、出来る事なら、彼等の戦闘も観戦したかったね」

また画面を切り替え、別の人物が映し出される。大型モニターに並ぶのは、セイバー、セイバールタ、そして隼樹の三人である。

前の二人は恰好よく剣の構えを決めているが、何故か隼樹だけ漫画雑誌を読んでいる姿だった。

小型ディスプレイに映るウーノが、口を開いた。

『今回は、初出勤で新人達の実力を試す機会であつたらしく、三人は同行なさらなかったようです』

「ふむ……。また機会があるだろうとは言え、やはり残念だね。ミッドチルダの魔導師や魔法とは異質の力を有する三人を、是非この手で隅々まで調べたいものだよ……！」

モニターに映る三人の顔を見て、スカリエッツィは不気味な笑みを一層深めた。

＊

無事に任務を終えた一行は、機動六課隊舎に帰還した。帰ってきたスバル達を出迎えたのは、セイバーだった。先頭に居たスバルが、セイバーに気付いた。

「あ、セイバーさん」

「お疲れ様です。無事に任務を終えて、何よりです」

隊舎に残っていたセイバーも、管制室の画面で様子を見ていた。

「はい！ これもなのはさんや、セイバーさん達の教導のお陰です！」

初任務から帰ったばかりだと言うのに、スバルは元気だった。

そんな相棒にティアナは半ば呆れ顔で笑い、エリオとキャラも笑顔を向かい合わせる。

和やかな雰囲気で、セイバーは唐突に言った。

「無事に任務を果たせたと言う事は、皆も“真のチームワーク”を理解したようですね」

「え……？」

セイバーの言葉に、フォワード四人は意表を衝かれたように呆けた顔になる。

——そう言えば、セイバーオルタさんが言ってような。新人達の後ろに立つなのはも、彼女の言葉を思い出す。するとセイバーは、メンバーの中からキャラを指名した。

「では、キャラ。真のチームワークについて、貴女の答えをどうぞ」
「えっ……！？ あ……その……」

急に話を振られ、キャラはどう答えればいいのか解らず、口ごもってしまふ。

他のメンバーも答えに窮する中、セイバーは無言で答えを促す。
やがて、キャラは静かに口を開いた。

「えっと……実は、その……私、訓練の時も、今日の任務の時も、チームワークの話を忘れてました……。その……“皆で協力する”とか、あんまり考えなくて……。
それよりも考えてたのは、“私が何とかしなきゃ”とか“私がエリオ君を護らなきゃ”……そんな事ばかりで……」

キャラの言葉に、他の三人も心中で同感と頷いていた。
皆、キャラと同じ考えだったのだ。

そして、キャラの答えを聞いたセイバーは、満足そうに笑った。

「キャラ、正解です」
「えっ！？」

答えたキャラ本人が、驚きの声を上げた。まさか、合っていると
は思わなかったのだ。

スバル達やなのはとフェイトも、意外そうな顔をしていた。
驚く一同に、セイバーは説明した。

「“チームワーク”と聞くと、殆どの人は“皆で力を合わせて立ち向かう”と答えます。ですが、ソレはオルタが言うように間違った認識です。」

“ 真のチームワーク ” とは、『 皆が 』では無く『 自分が 』なのです！ 『 私が 』 『 僕が 』 『 俺が 』 と言う意識を全員が持つて挑む事が、個々の能力を高めます。皆が力を合わせるとは、聞こえはいませんが、それではただの慣れ合いに終わってしまう。助け合うのではなく、『 自分が 』 助けるんです！

そして、コレはチームに限った事ではありません。今は四人一組、二人一組で闘っていますが、いずれ遅かれ早かれ一人で闘う時が来ます。そんな局面を迎えれば、自分一人だけで頼れる者など他には居ません。だからこそ、『 自分が 』 と言う強い意識が必要なのです。自分の力一つで、戦局は変えられるのですから。

どうか忘れないで下さい。『 自分がやる 』…… 単独でもチームでも、そういう気持ちで臨めば、諦めずに困難に立ち向かう事が出来ると言う事を……！ 」

セイバーの説明が終わると、場は静まり返った。

地獄のような訓練で皆を追い詰めたのは、ただ単に殺気や恐怖に慣れる為ではなく、困難で危険な状況で『 自分が 』 と言う意識を根付かせ、真のチームワークを解らせるのが目的だったのだ。

その事に気付いたフォワード四人は、セイバーに頭を下げた。

「セイバーさん、ありがとうございます！」

「いいえ。私はただ説明しただけで、実際に手助けをしたのはオルタです」

「あの……」

なのはの隣に居るフェイトが、控え目に手を上げた。

「そのセイバーオルタは、何処ですか？」

「え……？」

言われてセイバーは、周囲を見回した。

フェイトが指摘した通り、オルタの姿は無かった。管制室で、スバル達の戦闘を見ていた時には、確かに一緒に居たハズだ。

姿が消えたのは、おそらくスバル達が無事に任務を終えたのを確認した後だ。

その時、ハッとセイバーは目を見開いた。

「しまった……！」

「セ、セイバーさん！？」

一同の声も聞かずに、セイバーは慌てて踵を返して隊舎内に駆けこんだ。

階段を駆け上がり、廊下を走り、壁に並ぶ扉の一つを乱暴に開けた。

室内を見て、衝撃の光景をセイバーは目にして固まった。

「セ、セイバー！？」

「チツ……！ 思ったよりも早く戻ってきたな」

驚きの声を上げたのはリインフォース、忌々しげに舌打ちしたのはセイバーオルタ。

二人で何をしていたのかというと、答えは部屋の主にあった。リインフォースとオルタは、隼樹を挟み込む形で寄り添っていた。セイバーをフォワード陣の出迎えに行かせ、その隙に隼樹の身体を愉しもうと言う魂胆だったのだ。

「セ、セイバー……！ いや、あの、これは……！」

マズイ場面を目撃され、隼樹は顔を引き攣らせる。しかし、既に遅かった。

ワナワナと体を震わせ、真っ赤にさせた顔で、セイバーは大噴火した。

「何をしてるんですか、貴女達はアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

聖剣を手に、騎士王が暴れ回ったのは、また別の話。

自分（後書き）

主人公の出番が少ない？

主人公の活躍が全然無い？

いいんです。だって、隼樹だもの。

教会（前書き）

今回は、あの女性キャラがちよいやばい事に……。
うーん、大丈夫かコレ？

教会

フォワード隊の新人四人は、今日も早朝から訓練に励んでいた。セイバーとオルタの二人から受けた模擬戦と初任務の成功が、良い刺激になったらしい。以前よりも増して、訓練に熱が入っている。基本的には、午前と午後は正規の教導官や上司であるのはやフエイト達が教導するのだが、週に二、三回の割合で騎士王による実戦形式の訓練は続けられる事になった。こういう訓練は、折角覚えた感覚を鈍らせない為にも、続けていく事が大切なのだ。回数が減ったとは言え、訓練の中身は相変わらず殺気をぶつけてくる厳しいモノである。

初任務を終えてからは、個々の能力^{スキル}アップを目的とした個別指導に入った。なのは、フェイト、ヴィータが参加して全体的に訓練はハードになってきた。森林に変化させた空間スペースで訓練に励む一同を、セイバー、オルタ、アリシアの三人が見学していた。時折、見学している彼女達からも、助言が入る時があった。

例えば、こんな感じである。

なのはは、ティアナの能力アップの為に、射撃型の基本思想と技術を徹底的に鍛えようとした。具体的に説明すれば、定位置に立つて、なのはが動かす的を射撃で撃ち落とす訓練である。

チームの中央に立ち、誰よりも早く中長距離を制する。ソレが、自分やティアナのポジションであるセンターガードの役目だとなのはが語った。

しかし、ココで見学していたオルタが口を挟んだ。

「ソレは賢明な態勢では無いな。確かに、チームの中央に立って戦況を見渡して把握する事は大事だ。が、場合によっては、突っ立っている者は狙い撃ちされる標的以外の何者でもない。ランスタールは、高町のような砲撃タイプではなく、小回りの利く二丁拳銃が武器だ。

ならば、狙い撃ちを許さないよう動き回り、敵を制すると言う戦術も叩き込んでおけ」

オルタの指摘を受けて、なのはは自分とティアナの明らかな違いを自覚した。

なのはは一発のある砲撃タイプだが、ティアナは主に手数と小回りで攻める射撃タイプだ。センターガードと言う位置は同じでも、戦闘スタイルが根本からして違う。

ズバズバ遠慮なしに指摘してくるオルタだが、決して間違っではない。

教官であるなのはも、時折勉強になる時がある。まだ十九歳と言う若さなのだから、完璧に人に物を教えると言う方が無茶である。寧ろ、ココで間違いや新たな発見が出来る事は、幸いと考えるべきだ。

こんな具合で、隊長陣も新人達も一緒になって訓練に励んでいた。

*

機動六課で訓練が行われている頃、隼樹は別の場所に居た。

場所は、ミッドチルダ北部ベルカ自治区『聖王教会』大聖堂だ。かなり大きな教会建物で、数多くの次元世界に影響力を持つ何気に凄い組織でもある。

そのデカい組織の建物の入り口に、隼樹とはやての二人が佇んでいた。連れて来られた隼樹は、目の前に聳え立つ教会の高さに圧巻する。

「いやゝ、しかしデカいなゝ！」

「そやる？ 私も、初めて来た時は驚いたわ」

横で驚いてる隼樹を、はやては笑って見ていた。

その時、扉が開いて教会の人間が出てきた。入る際に、巡礼用のケーブを手渡され、身に纏うよう言われた。何でも、制服や私服では、教会の巡礼者を不安にさせてしまうらしい。管理局の中——特に地上本部——には、強い権力を持つ教会を嫌って敵視している者も少なくない。そう言った不仲な関係が、起因しているのだろう。

面倒臭いと思いつつも、隼樹は言葉に従って巡礼用ケーブを身に纏った。

そして、はやてと案内の職員と共に教会の中に、足を踏み入れた。今回、隼樹がはやてに連れられて聖王教会なんて所に訪れたのは、理由がある。機動六課の設立に貢献して、後ろ盾にもなっている人物に会いに行くのである。はやてとその人物は知り合いなのだが、隼樹はまだ顔を合わせてはいない。六課も発足されて、民間協力者として協力していく関係となつて良い機会なので、顔合わせをする事になったのだ。ちなみに、会った事は無いが、隼樹はその人物が誰なのか見当はついていた。

正体は解っているのに、警戒すべき相手で無い事も解っている。だと言うのに、何故か廊下を歩く隼樹は得体の知れない安を感じていた。ケーブの下顔を顰めて、妙な緊張感を抱く。

——何なんだよ……？ 自分でも解らないけど、何か妙な胸騒ぎと言つか……嫌な予感がするんだよね……。

不安を胸に、隼樹ははやてと二人で一つの扉の前で立ち止まった。はやてが手を伸ばし、軽く扉にノックをする。

「どうぞ」

扉の向こうから、綺麗な声が返ってきた。

「失礼します」

一言断り、はやてが扉を開ける。部屋の中に入り、ソコでようやくケープを外せた。

先にケープを外したはやてが、室内で待っていた人物と挨拶を交わす。

「久しぶりやな、カリム」

「ええ。いらっしやい、はやて」

明るい二つの声に、ケープを脱ぎ終えた隼樹が顔を向けた。ソコには、金髪の美少女が居た。長い金髪は腰まで届いて、窓から差し込む光を受けて煌びやかに光沢を放っている。頭には、紫色のリボンをカチューシャ風に付け、黒をベースとした修道服らしき恰好をしていた。陽の光を背にして微笑んでいるからか、聖母のような温かみがある印象を受ける。

——超綺麗じゃん……！

リアルで見るカリムは、かなりの美少女だった。セイバーに勝るとも劣らない容姿で、彼女とはまた違った魅力が感じられる。

隼樹が見惚れていると、カリムが挨拶をしてきた。

「初めまして。聖王教会騎士団の騎士、カリム・グラシアです」

「あ、どうも。初めまして。葉谷資隼樹です」

丁寧なお辞儀をするカリムに対して、隼樹も会釈する。

「立ち話もなんですから、どうぞお掛けになってください」
「ど、どうも」

カリムに促され、隼樹とはやては近くの椅子に腰をかけた。あまり彼女のような丁寧な対応を受けた事が無いので、隼樹は余

計に緊張していた。

三人が席に着くと、職員がタイミング良く紅茶を運んできてくれた。

テーブルに置かれた紅茶を見て、隼樹は心中にヤバイ、と思った。実は彼、紅茶が苦手なのである。甘い物は好きだが、紅茶独特の甘みがどうしても受け付けないのだ。まあ、しかし、飲めない程に完全に駄目と言う訳でもないの、残すのも悪いと思い、飲む事にした。カリムとはやてが飲んだ後に、自分も一口飲む。うん、やっぱり好きになれない。

「隼樹さん。はやてから聞きましたが、『イメージ』と言うレアスキルをお持ちのようですね」

「ええ、まあ……」

「もし、よろしければこの場で見せていただけないでしょうか？」

ハア、とカリムの要望に隼樹は頷いた。

能力を披露する事になり、何を実体化させるか考える。ややあって、ベタだけどコレかな、と頭の中で一つチョイスした。

無言でテーブルの上に両手を出し、頭の中で出す物を想像する。イメージ

突如、隼樹の両手が光に包まれ、見守るカリムは目を細める。次の瞬間、彼の手に現れたのは、二振りの双剣だった。中華風のデザインが施された白と黒の双剣は、正義の味方を目指した男が愛用していた『干将・莫耶』かんしょう・もへだ。過去に生み出した時は、剣の重みに苦しんだが、今回はちゃんと事前に『双剣の重みに耐えられる自分』をイメージしていた。

突然、手に剣を出した現象に、カリムは面食らった。

「話には聞いていましたが、本当に何も無い所から物を生み出せるのですね……！ 驚きました。何でも生み出せるのですか？」

「いえ、何でもって訳にはいきませんよ。魔力量を超えた事象は実

現出来ませんし、物も強力過ぎるのは作れませんから。まあ、万能じゃないって事です」

軽く説明をして、隼樹は干将・莫耶を消した。

彼の能力を整理しよう。実現不可能の例は幾つかあり、その中の一つが『無限の剣製』だ。アンリミテッドブレードワークス現実世界を侵食して、術者の心象風景を現す大禁呪。ジュエルシードの魔力では世界を侵食する事は出来ないので、コレは実現不可能。

次に宝具の精製。セイバーが使ってるような超強力な宝具『約束された勝利の剣』は、とても人の手では届かない神造兵器であり、ジュエルシードでは再現出来ない。干将・莫耶のようなある程度ランクが低い物ならば、実体化は可能。

本人も言っていたが、要するに体内にあるジュエルシードの限界を超える現象は起こせない、と言う事だ。一見チートのようなだが、決して万能ではない。

「それでも、凄い魔法だと私は思います。他の方には、とても真似出来るような事ではありません」

「まあ……そうですね……」

お褒めの言葉を頂いた隼樹だったが、あまり素直に喜べなかった。確かに能力に制限はあるが、『イメージ』は凄い。だが、決して“隼樹本人”の能力では無いのも事実。あくまで偶然体内に宿したジュエルシードちからの力であり、自分が凄い奴だと思った事は一度も無い。

そんな事情があつて、他人に褒められても隼樹は素直に喜べずにいた。

紅茶を楽しみながら（約一名除く）、しばらく部屋で雑談をした。

話題は、セイバー達や、その騎士王様コンビにしごかれたフオワードの四人の事など最近起こった出来事だった。

「それじゃあ、そろそろ戻ろうかな。六課の仕事もせなあかんからね」

時計を確認したはやてが、席を立った。

やっと解放される、と隼樹は心中に溜め息をついた。美少女と話が出来るのは悪くは無いが、男が自分だけと思うとどうしても落ち着かなかったのが本音だ。

隼樹も次いで席を立ち、退室前にケープを被ろうと手を伸ばした時だった。

「あつ、ちよつと待って下さい！」

「はい？」

急にカリムに呼び止められ、二人は退室する動きを止めて振り返った。

「はやて。彼と、もう少し話がしたいから、残ってもらっていいかしら？」

「え？ まあ、隼樹さんには特に仕事は無いから、本人さえ良ければ構わんけど……」

「どうでしょうか？」

カリムが尋ねてきたので、隼樹は考える。

断ってもいいのだが、今後の事を考えると無下にするのは良くないかもしれない。まあ、時間もそんなにかからないだろう。

「解りました。俺は別にいいですよ」

「ありがとうございます」

「ほんなら、私は先に戻ってるから」

ケープを被り、はやては先に退室した。

「それで話つて……っ!？」

はやての退室を見届け、振り返った時だった。

急にカリムが、隼樹に抱きつき、身を寄せてきたのだ。二人の身長は同じ位なので、彼の真横にカリムの綺麗な顔が添うような形になっている。胸部には、立派に膨らみのある胸が押し当てられていた。

突然の予想外の展開に、隼樹は動揺を禁じ得なかった。一気に顔を赤くさせ、取り乱す。

「は、はあっ……!？　ちよっ……カリムさん……!？　な、なな、何して……!？」

「この聖王教会では、過去に男女の關係に堕ちた事が原因で、ある大事件が起きました。その事があり、以後、教会の者は職員同士の恋愛行為が禁止されたのです」

隼樹の取り乱す様を意に介さず、唐突にカリムが教会の事について語り出した。

——な、何言ってたんだ、この人……!？　何の話をしてるんだ……?　教会の人間同士の恋愛が原因で起こった大事件……?

混乱する隼樹の頭に、思い当たる事件が一つ浮かび上がった。

——ああっ……!　もしかして、『聖骸布盗難事件』か……!？　ドゥーエが教会のシスターに成りすまして、聖骸布の管理を担当してた司祭を誑かして盗ませたって言う……!　

隼樹の考えは、当たっていた。

あの事件以降、教会は職員の恋愛を固く禁じる規則を設けた。そんな規則に縛られ、教会内での男女間では見えない壁が出来ていた。しかも、教会の職員であり、上の立場に立つカリムは、気軽に外出する事すら出来ない。つまり出逢いが無い、教会に閉じ込められた箱入り娘状態なのだ。

流石に外出禁止の件までは知らないが、恋愛に縁が無い状態なのは解った。

でも、だからって俺を選ぶか？　と言う気持ちはあった。俺を相手に選ぶなんてどうかしてるぞ、と言うのが隼樹の本音である。

——くそ！　俺が感じてた胸騒ぎは、コレかあ！

「いや……いや、事情は解らなくも無いですけど……」

「私では、ご不満ですか？」

潤んだ涙目で、カリムが迫ってきた。

その可愛さに、ぐう、と隼樹の心は激しく揺れて呻く。

「いやいや、不満とかそういう事じゃなくてですね、相手はちゃんと選びましょうって言ってるんですよ……！　俺は、もう四人の女性と付き合ってるような、その優柔不断と言うか、節操無しと言うか……とにかく、駄目な男なんですよ……！！」

「そんな貴方を誘惑してる私は、もっと酷い女です……！！」

自分を卑下して引き離そうとする隼樹だったが、相手は更に上を行っていた。

「聖王教会騎士団に身を置く騎士ですが、私はそんな綺麗な女では無いんです……！　隼樹さん……そんな私を、受け入れてくれますか……？」

問い掛けながらカリムは、顔を近付けて迫ってくる。

壁を背にしている隼樹は、逃げる事も抗う事も出来ずに、徐々に追い詰められていく。鼻と本能を刺激する甘い匂いを纏った美少女の唇が、隼樹の口を塞いだ。柔らかく、張りのある綺麗な唇を受け、隼樹は目を見開いた。

カリムは体を密着させた状態を保ち、キスを続ける。

「ん……！ んん……！」

初めて味わうキスの味に、カリムは夢中になっていた。舌を相手の口内に突っ込み、唾液と舌同士を絡め合う。口の中で淫らな音を鳴らし、口端からは一筋の涎を垂らしている。

隼樹の背中に回した腕は、力を込めて離さないように強く抱き締めている。捕まってる隼樹は、甘い接吻の味と押し付けられる胸の感触、甘い香りに興奮が昂る。いつの間にか、隼樹も抑え切れずにカリムを抱き締めていた。

「んむっ……！ ちゅぱ……はむ……！ んっ……！」

誰かが部屋に入ってくるかも、なんて危機感も抱かず、濃厚なキスを続ける。

同じく興奮状態のカリムも、顔を真っ赤にさせ、息を荒くして、身体を火照らせていた。

ややあって、ようやくカリムは隼樹から顔を離れた。開いた口から濡れた舌を僅かに出し、赤い顔は艶っぽく惚けている。

「コレが……キスの味、ですか……！ 凄く、良かったです……！」

キスの快感を味わい、満足そうにカリムは言った。指で口周りの涎を拭う仕草は色っぽく、とても教会に身を置く聖職者には見えな

い。

「隼樹さん……！ これからも、私の相手をしていただけませんか……？」

「そ、それは……」

興奮冷めやらぬ隼樹は、頭を掻き乱した。
迷ってる素振りを見せると、カリムが迫ってきた。

「ご迷惑でしょうか……？」

僅かに頭を下げ、濡れた瞳での上目遣いを向けてくるカリム。
目の前の美少女の仕草に、隼樹はドキツとなる。見上げる顔の角度、表情、全てが男の本能を刺激して虜にする完璧なポーズだった。
カリムに迫られ、隼樹はより一層激しく頭を掻いた。

「……女ってズルイですよ、カリムさん」

「では……」

「ん……。ま、まあ……たまに、なら……」

「ありがとうございます！」

隼樹の同意を得ると、カリムは一転して嬉しそうに笑って抱き付いてきた。

どうも自分は、女からの押しに弱いようだ。

まいったな、と隼樹は困り顔で力無く頭を掻いた。

*

カリムの部屋を出た隼樹は、閉じた扉の前で頭を抱え、座り込んだ。

——何をどうしたら、こうなった……？

屈んで苦悩する隼樹の前に、人影が現れた。

「どうしたんだ？ 大丈夫か？」

「え……？」

降りかかった声を聞いて、隼樹は顔を上げた。

目の前に居たのは、同じくケープを纏った若い男だった。ミッドには珍しい黒髪で、髪型は短く、顔は整ったイケメンだ。

「ああ……！」

黒髪の男を見た隼樹は、弾かれたように立ち上がった。

「クロノ君じゃないか……！」

「やあ、久しぶりだな、隼樹……！」

相手の男は、クロノ・ハラウン。現在、時空管理局の次元航行部隊の艦船艦長を務め、提督の地位に着いているエリートだ。元アイスラの一員だったエイミィと結婚をして双子の父までしている、隼樹と違ってシッカリ家庭を持った出来る男である。

親しい感じで接してる二人だが、初めて出会った当時は最悪な間柄だった。何せ隼樹は、『原作でフェイトを傷付けた』と言うあんまりにもあんまりな理由で、十年前のジュエルシード事件でクロノをリンチの如くボコボコにしたのだ。その後の『闇の書事件』でも、険悪な関係は変わらずだった。

しかし、後から冷静になって考えた隼樹は、自分の間違いに気付いた。原作でクロノが牽制目的で放った魔力弾でフェイトを傷付け

たのは事実だが、『この世界のクロノ』は、フェイトを傷付けては
いない。隼樹と言うイレギュラーな存在が介入した事で、その場面
が無くなったのだ。つまり、『この世界のクロノ』は何にも悪くな
いのだ。それに原作での彼の行為は、ジュエルシードを身元不明の
魔導師に奪われない為の局員としての当然のモノだった。自分の間
違いに気付いた隼樹は、流石に罪悪感を抱き、クロノに謝罪する事
を決意する。はやてが入局の意を伝える時に、ちょうどクロノも立
ち合っていたので、思い切って彼に謝った。クロノも、捜査のやり
方が強引だった事や柔軟さに欠けていた事を謝り、互いの非を認め
合う。

それから二人は、友好的な関係になり、現在に至る。

「しかし、キミがこんな所に居るなんて珍しいな。何か用でもあつ
たのか？ ソレに何だが、落ち込んでたと言うか、悩んでるように
見えたが……」

「あゝ、ソレは……」

理由を訊かれた隼樹は、カリムとの出来事を打ち明けようか悩ん
だ。

しかし、一人で溜め込むより、親友に話した方が気も少しは楽に
なるかも、と思い、正直に話す事を決意した。

「クロノ君……キミ、口固いよね？」

「僕が真面目なのは知ってるだろう？」

クロノの笑顔を見て、隼樹は改めて話す事を決めた。
他人に聞かれ^{ひと}ないように、とりあえず教会を出る事にした。

聖王教会を出た隼樹は、全てをクロノに話した。

部屋で起こった出来事を話終わると、クロノは難しい顔になった。

「そうか……騎士・カリムがそんな事を……」

「そうなんだよ……」

外に出た二人は、ミッドのとあるファミレスに居た。二人が着いてる奥の席は、他の席と離れた位置にあって他人に会話を聞かれる心配は無い。

話を聞いたクロノは、しばらく考えて意見を言った。

「僕の考えだが、騎士・カリムは誰かに甘えたいんじゃないかな」

「甘えたい？」

「ああ。いくら優れた騎士で理事官とは言え、まだ若い女の子だ。

仕事のプレッシャーもあるだろうし、教会内には特別仲の良い男の友人は居ない。それ以前に、男女関係が厳しい教会内では、頼れる男の友人すら作れない。だからと言って、局員の男に頼る訳にもいかない。聖王教会と管理局は深い関係にあるが、決して友好的では無いからな。局員との付き合いも、万が一公になれば問題になる」

「ソコで白羽の矢が立ったのが、民間協力者とは言え一応民間人の俺……って事なの？」

「まあ、あくまで僕の推測だがね」

しかし、クロノの推測はあながち間違いでも無いように思える。

思い返してみると、部屋で迫ってきたカリムは何処か寂しそうと言うか、辛そうな感じに見えた。

けどな、と隼樹は頭を掻いた。

「だからって、いきなりキスは無いだろう？」

「確かに、ソレには僕も驚いてるよ。騎士・カリムも、意外と積極的なんだな」

クロノの言葉に、隼樹は一つの懸念を抱いた。自然と声を潜めて、言った。

「ねえ、クロノ君……。まさかとは思うけど……。カリムさんが、俺に惚れてる、な。んて事は無いよね？」

「さあな。いくら僕でも、ソレは推測のしようが無い」

「いつそ否定してくれよ！」

頭を抱え、テーブルの上に突っ伏した。

悩む隼樹の前で、クロノは壁にかかった時計を見て時間を確認した。

「済まない、隼樹。これから仕事があるんだ」

「……。ん？ ああ、分かった。いいよ、行ってきた」

「悪いな。騎士・カリムの件だが、セイバー達に殺されないよう気を付けろ、としか言えないな」

「ご忠告ありがとう。仕事頑張つてね」

「ああ。また何かあったら、連絡してくれ。それじゃあ」

クロノは席を立ち、店を出て行った。

残された隼樹は、すぐに機動六課に帰る気になれず、もう少し一人の時間を過ごそうと思った。

しかし、彼の女難はまだ終わってはいなかった。

*

時間は少し遡り、所変わってスカリエッティのラボ。

「失礼します、ドクター」

「ん？」

研究室のデスクに座るスカリエッティの前に、秘書であるウーノがやってきた。

「何だね、ウーノ？」

「実は、少しお暇を頂きたいのですが、よろしいでしょうか？」

ほお、とウーノの要望にスカリエッティは意外そうに反応した。彼の知る限り、ウーノが休みを求めてきたのは、今回が初めてだ。普段とは違う彼女の行動に、スカリエッティは少なからず興味を抱いた。

「何か用事でもあるのかね？」

「はい。少し、私用がありました……」

「ふむ……。いいだろう。特に、これと言って急ぎの予定も無いからね。好きにしまえ」

「ありがとうございます。それでは、失礼します」

丁寧に頭を下げ、ウーノは研究室を出て行った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0360z/>

IMAGE～ラストイメージバトル～

2011年12月2日18時04分発行